

経済学がもっと面白くなる〈情報&メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報

【エコノ】

2017. 冬・春号

# econ. No. 35

## 特集 女子たちの経済学部

●座談会「1年女子の本音トーク」●先輩女子「充実してます! 経済学部での学び」



### news 1

地域インターンシップ・シンポジウム  
(5 ページ)

### news 2

2016年度 地域研修報告会  
(6 ページ)

### news 2

過労死問題シンポジウム  
(7 ページ)

### news 2

東北・北海道学生経済ゼミナール大会  
(7 ページ)

### 連載企画 研究室の窓から

早尻正宏先生 (9 ページ)

news 3 特別講演会「税・財政の現状と課題」  
(8 ページ)

news 3 経済学部プレゼン大会  
(8 ページ)

news 4 就職情報 (12 ページ)

### 連載column

From a Distance ⑦

辻弘範先生 (12 ページ)

### interview

OB訪問働きマン吉田翔さん (10 ページ)

「僕が、見た、旅。」2016 バックミンスター発行

20名の方に、読者プレゼント! (応募方法は11 ページ)



# 特集 女子たちの経済学部

## 特集座談会「1年女子の本音トーク♪」

### & 先輩女子「充実してます！経済学部での学び」

経済学部は伝統的に男子学生の割合が高く、女子学生が少ないのが特徴です(2016年10月1日現在、本学経済学部の女子比率は19.6%)。経済において女性は、かつては「家事労働」や「消費の牽引役」を中心的に担ってきましたが、近年は「起業」や「労働力供給」面での「女性の活躍」がますます期待されるようになってきています。こうした時代においても、経済学はやはり女性にとって魅力に乏しい、役に立たない学問なのでしょう？“ケーザイ女子”のホンネはいかに？本学経済学部在籍する女子学生の皆さんに、大学での学びの実像を聴きました。



【司会】

中井田 知実さん

経済学部2年 西村ゼミ  
経済学部ゼミナール協議会  
石狩南高校出身

【司会】

鈴川 奈侑さん

経済学部3年 水野谷ゼミ  
経済学部ゼミナール協議会  
札幌月寒高校出身

● 工藤 千優さん

経済学部1年 一條基礎ゼミ  
ボランティア学生団体 Be-Harmony  
市立函館高校出身

● 藤川 咲良さん

経済学部1年 早尻基礎ゼミ  
北海学園生協学生委員会 (G'stAff)  
札幌静修高校出身

● 牧野 睦さん

経済学部1年 西村基礎ゼミ  
スカッシュラケット部  
北海学園札幌高校出身

● 池田 梨乃さん

経済学部1年 早尻基礎ゼミ  
経済学部ゼミナール協議会  
深川西高校出身

● 林 茉優さん

経済学部1年 西村基礎ゼミ  
経済学部ゼミナール協議会  
札幌清田高校出身

※記載順<氏名、学年、所属ゼミ、所属団体・サークル、出身校>

## 私たちが経済学部を選んだワケ



**司会(鈴川)** まず、経済学部を選択する女子が少ないなかで、なぜ経済学部を選んだのか、聞かせてください。

**林** 私は将来の夢がまだなくて、経済学部が一番どんな分野にも行けそう、と考えたからです。

**牧野** 私も正直、消去法です(笑)。でも、入学後に越後修先生の研究室を訪問して「なぜ経営ではなく経済を選んだか」という話になったとき、「経営は会社の中のお金のこと、経済は社会全体のお金のことを学ぶ」と聞いて、「経済でよかった、ラッキー!」と思いました(笑)。あと、学園で最初に設立されたのが経済学部というのもあって、学部紹介を読んでも一番しっくりしている気がしました。

**藤川** 私、本当は経営学部に行きたかったのですが、公募推薦で経済学部を受けることができたからです。

**工藤** 私は経済学部に入りたかったのではなく、地域経済学科に入りたかったんです。莉乃(池田)も、地域経済学科に入りたかったからじゃなかった?

**池田** 大学へ行きたいと思って調べたら、学園の地域経済学科では、現地を調査訪問する「地域研修」があって、ほかの学科に比べたら座学だけじゃなさそうだな、と興味を持ちました。あと、社会教育主事の資格を取ろうと思っていたので、地域経済について一番学べると思いました。



**司会(中井田)** 私も牧野さんと似ていて消去法でした。学園といえば経済か法学、と言われていたし。

**司会(鈴川)** 私も地域研修へ行きたいと思ったのと、とりあえず経済学部に行っておけば、将来なんとかなるんじゃないかと思った、というのが正直なところかな。

じゃあ、経済学を1年間学んで、面白かったり、興味を持ったことはありますか?

**林** 経済のことばかりを学ぶのかなと思っていたら、意外と「ハリー・ポッター」などが授業で出てきて、びっくりしました。

**司会(鈴川)** 「現代文化論」ね。「ダ・ヴィンチ・コード」もね(笑)。

**牧野** 「社会経済学基礎」は、勉強の内容は結構好きですね。労賃金のことや、実質的な物の価値など面白いですが、毎週

課題がツライ…。

**工藤** 私は「地域社会論」。特に後期は、具体的なまちに焦点を当てて、統計や資料を見たり、政策を学んだりするのが面白いです。

**藤川** 「ミクロ経済学」や「マクロ経済学」は難しいし、興味を持てるものがまだなくて…。ただ、テスト勉強しているとき、「経済統計学」はひたすら計算しているのが楽しかったです。2年生からは、地域研修があるので興味を持ってそう。

**司会(鈴川)** 地域経済については、みんな関心が高いようですね。

## 女子少なめは、デメリット?!

**司会(鈴川)** 女子学生が少ないことで、メリットやデメリットを感じたことはありますか?

**林** デメリットしか思い浮かばない(笑)。女子友があまりできなくなりました。

**司会(鈴川)** 確かに、ある一定以上は増えないね。男子は多いから友達が増えるけど、女子は基礎ゼミでも数人しかいないし。でも、メリットがあるとしたら?

**林** 宿題は、女子には聞きにくいけど、男子には聞きやすいかも。男子は女子に教えてもらえるから、男子をあいだに挟んで真



経済学部新年度ガイダンス



経済学部新入生ガイダンス



北海道学特別講義で鈴木直道夕張市長のお話

面目な女子から聞けます (笑)。

**工藤** 私は、高校のとき女子ばかりの中だったので、男子の友達が増えて考え方の視野が広がったかな。

**司会 (鈴川)**：基礎ゼミは男女比が何対何くらい？

**全員** 12対4とか。

**司会 (鈴川)** 最初教室に入った瞬間、「わー、こんなに男子いるの?!」って思うよね。

**全員** わかるー。

**牧野** 私は部活に同じ経済の子がいるので一緒に授業を受けたりもするけれど、お互い単独行動するタイプ。だから私には女子の面白い事情はないです (笑)。

**司会 (鈴川)** 面白い事情のある人、いない? (笑)

**池田** 最初4人グループだったのが、3人になりました。

**全員** 1人だけ減ってっていうのもコワイ〜!

**藤川** 私も最初のころ5人でいて、後期になったら4人に減り…。その子はサークルで別の友達ができたからだと思います。

**司会 (鈴川)** ティーパーティー (入学前の顔合わせ) でグループができて、そこから少しずつ変わっていくよね。

**藤川** とにかく男友達がひたすら増えます (笑)。男女混合のグループも多いし。それがいいところなのかも。女子ばかりでもいろいろ面倒だし、少なくとも

思います。

**司会 (中井田)** 2年生になったら、ゼミでは男女半々くらいになるしね。

**司会 (鈴川)** ゼミにもよるかも。私のゼミは2、3年生合同で28人いて女子4人だから。でも、女子友が少なくとも本当に仲の良い人が1人いれば大丈夫じゃないかな。

### 経済を学んで見つける将来の道

**司会 (中井田)** これから学びたいことや、卒業後について考えていることはありますか？

**池田** 社会教育主事課程を取っているのですが、その方面に就職したいというのがあります。

**藤川** 小さなころから野球が好きで、北海道日本ハムファイターズが地域に根付いていくのをずっと見てきました。経済学部プレゼン大会でもファイターズについて発表して、優勝できました! 将来的には、球団職員になれば嬉しいな。

**工藤** 私は卒業したら地元の函館に戻るつもり。離れてみて、やっぱりいい街だなと感じます。観光に携わって地域貢献できたらと思っていたので、2年生からは、念願の地域経済学科に入ります。

**牧野** 2年生から越後先生のゼミなんですけど、全国大会にも行くほどプレゼンのレベルが高いのが特色で、プレゼン大会に出るのが目的で入りました。西村先生の基礎ゼミで学内プレゼン大会に出たのが楽しかったからです。

**司会 (鈴川)** 何の発表をしたの？

**牧野** 「ソーシャル・ネットワークが与える影響について」。メンバー全員で分担してちゃんと調べるのが面白かったし、プレゼンがきっかけで考えることもありました。2年生でもプレゼン大会に出られたらいいな、と楽しみです。結果的にプレゼン力が就職につながれば…とも、ほんやり思っています。

**林** 私は、まだ将来のことは全然決まっていません。これから資格をいっぱい取っておこうと思っています。英語も習って英検も取りたい。

**池田** 社会教育主事と施設職員の2つの道



があるので、どちらかに就きたいです。札幌ではなく地元の北空知管内で就職したい。今、雨竜町の青少年体験活動支援施設で、子ども向け体験のボランティアをしているのですが、そのような施設を考えています。  
**司会 (鈴川)** 私の場合、将来は別になんの仕事でもいいやと思っていたけれど、水野谷先生のゼミで地域経済や過疎化について学んでいくなかで、地域に根ざした仕事に就きたいと思うようになった。地元の江別でボランティア活動もしてきたので、その活動も生かせる仕事として公務員に行き着いたんだけど、本気出したのがこの10月だったんだよね。だから、みんな1年生からちゃんとしているなあと感心しました。



## 大学生活でしかできない体験を！

**司会（鈴木・中井田）** では、私たち3年生に聞いてみたいことはありますか？

**牧野** 2年生でコースが分かれたときに、新しい友達ってできないんですか？

**司会（鈴木）** 2年生よりも、3年生で1つの授業の人数も少なくなるし環境が変わるかもしれない。友達が受けていない授業に1人で飛び込んでみる、というのもありかもね。あと、2年生からは先生のこともわかるようになった。授業で怖いと思っていた先生も、直接話してみると面白かったり。

**全員** へえ～。

**司会（鈴木）**：大学生活は授業以外の時間が多いから、やれることはいっぱいあった、と今になって思うんだよね。特に、ボランティア活動を大学生のときにできてよかつ

たと思う。就職するとできないこともいっぱいあるので、授業はもちろん授業以外の時間をどう使うかも、大事にしてほしいな。

**司会（中井田）** 大学生活でしかできないことに取り組んでほしいですね。それではみなさん、ありがとうございます！

（以上、敬称略 2016年12月開催）



## 先輩女子「充実してます！ 経済学部での学び」

ゼミ選択は大事なので、  
直接内容が聞けるゼミ説明会をやりましょう！



### ● 谷口 明華里 さん

地域経済学科2年 大貝健二ゼミ（経済地理学）  
北海道登別明日中等教育学校

地元の地域の夏祭り主催者の中で活躍していた、地域経済学科一期生のOGの方とお話する機会があり、地域経済学科って面白そうだと興味を持ちました。指定校推薦もあり、他大学と比較して本学に決めました。ゼミは大貝先生の研究室訪問をして、先生の熱い思いに触れて決めました。ゼミでは女子は私だけですが、上級生のゼミⅡ、Ⅲとの縦の繋がりもあるので、全く気になりません。地域研修で十勝地方の農商工連携や6次産業化、農業者の熱い思いに触れて地域の人に学ぶことができました。天売島での地域インターンシップやそのシンポジウムにも参加する経験をして、インプットだけでなくアウトプットすることで大きな学びにつながりました。北海道に住んできた目線を忘れずに、これからも北海道のことを

もっと知りたいし、そこから日本全体や海外のことへも視野を広げたい。ちゃんと地域が見れているのが大事だと思います。楽な方向に流されずに、自分のやりたいことを持ち続けていければ経済学部は楽しいと思います。



●天売島での地域インターンシップ参加者と

ゼミの垣根を越えて議論  
できる、インゼミのよう  
な交流がしたい！



### ● 伊藤 紗瑛 さん

経済学科3年 川村雅則ゼミ（労働経済論）  
北海道大麻高校出身



●過労死問題シンポジウムで質疑応答

学科選択をするときに、ゼミ訪問や資料を読んで、将来的に直接自分に関わってくる労働の分野のことを勉強したいと思いました。先輩からゼミの噂を聞くとしっかり勉強できるゼミであることを知りました。毎年ゼミでは「アルバイト白書」を作成しますが、コンビニアルバイトの調査・集計をしたり、また、地域労組を訪ねて労働現場の話を聞いたり、それを論文作成に繋げたりしています。昨年は過労死の問題をテーマに、シンポジウムも行いました。学んだことをどう伝えるか大変でしたが、わからなかったことがわかって行く面白さがあります。論文を持って山口大学での日本学生経済ゼミナール大会（通称インゼミ）にも参加して他大学と議論を行ってきました。海外の労働事情についてももっと知りたいと思うようになり短期留学もしたいです。将来的には地元の自治体職員として、学んだことを活かして行きたいと思っています。自分の生活に関わっている大事な分野に、自分の足で現場を訪ね学ぶことができます。学びたい気持ちがあれば、チャンスはたくさんあります。

[平成 28 年 11 月 18 日] 経済学部主催

# 地域インターンシップ・シンポジウムを開催

シンポジウム「地域インターンシップって何だ？ 天売島の実践から振り返る」が開催されました。経済学部では来年度から新しく「地域インターンシップ」科目を開講する予定です。この科目は地域に中長期滞在し様々な地域活動に従事することを通じて、地域の魅力・課題・可能性を学び、考え、行動・発信する力を伸ばすことを目的としています。今年度は試行的に学生6名が羽幌町天売島で8月に1週間のインターンを実施したので、その成果について報告がありました。シンポジストは参加学生の他、受け入れ先である天売島おらが島活性化会議専務理事の坂本学氏、コーディネーターとして参加した北海道エンブリッジの浜中裕之氏（本学経済学部卒）でした。シンポ前半では両氏から自己紹介とともにこのインターンシップに参加した理由が語られ、学生からは島民と交流するために開催したお祭りの苦労話やそこから感じ取った島の課題などについて発表がありました。シンポ後半では会場からの質問に答える方たちでディスカッションが行われました。来年度も天売島で地域インターンシップが実施される予定です。（水野谷）



写真左上：天売島での地域インターンシップで漁業体験、上：地域インターンシップで天売島の皆さんと、右：野口ゼミ



**ゼミはやりたいことを見つけて、4年生まで続けたら絶対面白い！**

● 黒澤 紗依 さん

経済学科4年 野口剛ゼミ（財政学）  
北海道札幌国際情報高校出身

将来的に金融の仕事を志望していたので（※黒澤さんは三菱東京UFJ銀行外国為替部門に内定）、ゼミの先生が金融機関のご出身ということもあり、仕事への興味とも重なりました。また他大学とも交流、議論を重ねたりしながら論文を作り上げて行くなど、3年間きっちりと学べそうなゼミだと思いました。2年生では財政学の入門的なことを学び、3年生では好きなテーマを選び3、4人のグループで論文を作成、それを持って関西大学の財政学ゼミと交流し、さらに研究を深めました。4年生ではその論文をブラッシュアップさせて各自の論文に仕上げました。消費税を



●ゼミで研究活動

テーマとしましたが、知っているようなことでも、海外と比較すると新たな問題点が見つかったり、試行錯誤の連続でした。夏休みも集まって議論したり、先生の研究室を訪ねて意見をいただいたり、締め切りもあるので大変でしたが、頑張った良かったと思います。イギリスに短期留学もしましたが、大学では自分で考え、動くことが大事。やりたいと思ったことは積極的にやるべきだと思います。





平成28年11月26日・12月3日  
1部・2部ゼミナール、地域研修Ⅰ・Ⅱ  
**2016年度 地域研修報告会の開催**

2年次以降のゼミナール所属学生が履修する「地域研修」の報告会が11月26日(土)と12月3日(土)に開催されました。2日間で24のグループが4グループずつ3つの教室に分かれ、研修成果の報告と質疑応答に臨みました。

「地域研修」とは、学生たちが、現実の生きた経済・社会を体感するため普段の学びの場である教室を飛び出し、地域の現場に足を踏み入れ、自治体や企業、各種団体などで聞き取り調査をおこなうものです。各ゼミでは、調査テーマの設定、各種資料の収集・分析など事前学習を進め、夏から秋にかけて、道内だけでなく新潟県や沖縄県にも足を運びフィールド調査をおこないました。今回の報告会はこの「地域研修」の総まとめに当たります。

報告テーマは農業、観光、労働など多岐にわたり、密度の濃い内容も少なくありませんでした。フロアからの質問に返答を窮する場面もみられましたが、問い掛けに対し真摯に向き合う姿が印象に残りました。また、各教室に配置したコメンテーター(教員)の講評は、今後のゼミ学習の手引きになると同時に、「地域研修」を充実させていくうえでも示唆に富むものでした。

今回初めて報告会に参加しましたが、地域が直面する課題をリアルに把握するという「地域研修」の目的はおおむね達しているように思います。周知のとおり、地域課題を把握し具体的な解決策を練り上げるためには、説得力のあるデータの収集・分析とその積み上げが不可欠です。引き続き研修成果のとりまとめとゼミ学習を通して、地域経済の実態と課題、展望を見抜く力を養うことを期待したいと思います。(早尻)



**報告ゼミと研修地**

●11月26日

- 40番教室 コメンテーター：西村先生(司会)、大貝先生、濱田先生
  - ①大貝ゼミⅠ(十勝)                      ③西村ゼミⅠ・Ⅱ(江差)
  - ②水野谷ゼミⅠ・Ⅱ(厚沢部)          ④地域インターンシップ合同ゼミ(天売島)
- 50番教室 コメンテーター：佐藤先生(司会)、宮入先生、水野谷先生
  - ①水野谷ゼミⅠ・Ⅱ(木古内)          ③宮入ゼミⅠ・Ⅱ(余市・仁木)
  - ②川村ゼミⅡ(札幌)                      ④中圃ゼミⅡ(ニセコ)
- 16番教室 コメンテーター：中圃先生(司会)、内田先生
  - ①中圃ゼミⅠ(ニセコ)                      ③大貝ゼミⅡ(新潟)
  - ②平野ゼミⅡ(陸別)                      ④内田ゼミⅡ(留萌)

●12月3日

- 40番教室 コメンテーター：徐先生(司会)、奥田先生
  - ①奥田ゼミⅡ(函館)                      ③徐ゼミⅠ・Ⅱ・2部(旭川)
  - ②山田ゼミⅠ(余市・小樽)              ④佐藤ゼミⅠ(枝幸・歌登)
- 50番教室 コメンテーター：浅妻先生(司会)、古林先生
  - ①古林ゼミⅠ(函館)                      ③水野ゼミⅠ・Ⅱ(月形・当別)
  - ②浅妻ゼミⅠ・Ⅱ(北見)                  ④山田ゼミⅡ(沖縄)
- 16番教室 コメンテーター：宮入先生(司会)、山田先生
  - ①佐藤ゼミⅡ(石狩)                      ③川村ゼミⅠ(札幌市)
  - ②浅妻ゼミ2部Ⅰ(北見)                  ④古林ゼミⅡ(日高)

[平成 28 年 11 月 19・20 日] 経済学部ゼミナール協議会主催

## 東北・北海道学生経済ゼミナール大会

経済学部ゼミナール協議会（経済学部生による学生団体）が東北・北海道学生経済ゼミナール大会の第59回目となる大会を本学で主催しました。この歴史ある大会は東北・北海道の大学で経済・経営・商学部等のゼミナールが参加して研究成果を発表する場です。今大会には、ノースアジア大学（秋田県）、東北学院大学（宮城県）、旭川大学、北海学園大学の5大学から21チーム、計116人の学生が参加しました。大会は11月19日に予選が行われ、11月20日に予選を通過した6チームによる決勝のプレゼンがあり、優勝には東北学院大学・篠崎ゼミEの研究発表「地域間所得格差についての研究」が輝きました。

学生によるこの大規模な研究大会を主催・運営した経済学部ゼミナール協議会会長の中田大嵩くん（経済学部地域経済学科3年生、旭川大学高校出身）によると、大会当日を迎えるまでの約半年、本当に忙しく、いちから学生だけでの準備となるためわからないことも多く苦労したが、周りのサポートなどに支えられ無事大会を終えることが出来てほっとしてとのことでした。また、学生のうちに素晴らしい経験ができてよかったし、周りの仲間感謝しているとも語っていました。（水野谷）



[平成 28 年 11 月 25 日] 主催：川村雅則ゼミナール、

共催：憲法・政治・安保法制を考える北海学園大学教員有志の会

## 過労死問題シンポジウムが開催される

昨年11月25日、「大学生が考える過労死問題シンポジウム」と称した企画をゼミで開催した。

大手広告代理店における新入女性社員の過労自殺を機に、日本の職場の異常な働かされ方があらためてクローズアップされている。四半世紀前にもやはり新入社員を過労自殺に追い込んだ同社の体質は厳しく批判されてしかるべきだが、ただ、こうした働かせ方を容認してしまっている日本の労働時間法制度の欠陥にも目を向ける必要がある。

今年度のゼミでは、若年労働者にひろがる過重労働や過労死問題を調査・研究テーマに設定し、文献研究や論文執筆に加えて、後期に入ってから、過労死被災者の遺族や、彼らを支援している弁護士、NPO 法人関係者などから話を聞いてきた。今回のシンポジウムでは、その成果を報告し、同時に、自分たち学生には何ができるのかを考えた。個人の尊厳が守られる職場や社会をどうすれば築くことができるのか、自分事として考え続けてもらいたい。（川村）



**過労死問題の現状と対策は 北海学園大でシンポ**  
11/26 05:00



北海学園大（札幌市）の学生が過労死問題の現状や対策を報告する「大学生が考える過労死問題シンポジウム」が25日、同大で開かれ、労働基準法などのワークルールを学ぶ必要性などを訴えた。

労働経済学を専攻する川村雅則教授のゼミが、過労死問題を研究してきた3年生7人に発表の場をつくろうと初めて実施。学生や地域住民ら約40人が出席した。

ゼミ生たちは、電通の石手社員が過労自殺した事例などを紹介。長時間労働の背景に、無制限の残業を事実上可能にする労使協定「三六（さぶろく）協定」や、経済優先の考え方がありと指摘した。

今後の対策としては、義務教育でワークルールを学ぶようにしたり、道内の学生らで団体を立ち上げ、労働時間の上限を設ける条例づくりを目指したりすることなどを提案した。

北海道新聞電子版（11月25日）に掲載されたシンポジウム



[平成 28 年 11 月 22 日] 1 部 財政学II特別講演会

## 『税・財政の現状と課題』



11月22日(火)に、財務省主税局総務課兼調査課課長補佐の大西佑作氏を講師にお迎えし、『税・財政の現状と課題』というタイトルで、講演会を開催しました。毎年のことですが、この時期は、来年度の税制改正に関する議論が積極的に行われる「税の季節」にあたります。したがって、この時期に、財務省でご活躍されている大西氏から直接、税に関するお話を聞くことが出来るタイムリーな企画となりました。ご講演では、税収、歳出、公債発行額や政府債務残高の推移等からわが国財政の実態の把握となぜそうなったのかを簡単に分析された後、消費税、所得税を中心に、その基本的な仕組みと課題を説明されました。特に、今年度税制改正の焦点の1つであった配偶者控除については、さまざまな資料を提示されながら、丁寧に解説をいただきました。約150人が受講しましたが、受講後の感想によりますと、講義とあわせて税への理解がさらに深まった、税は整理しながら勉強しないと混乱しそうだ、残念ながら時間の都合で省略されたお話も聞きたかった、などの感想が寄せられました。大西氏をはじめ、講演会開催にご尽力いただきました皆様に、改めて感謝申し上げます。(野口)



[平成 28 年 11 月 12 日] 基礎ゼミナール、経済学部ゼミナール協議会主催

## 経済学部プレゼン大会が開催される

11月12日に、今年で8回目となる「学内プレゼン大会」が開催されました。この大会は経済学部ゼミナール協議会が主催し、学生主体で運営されていますが、基礎ゼミでアカデミック・スキルを学ぶ1年生が、学んだ成果を発表する場としても定着してきました。今回は、1部と2部の9つの基礎ゼミから23チームがエントリーし、3つの会場に分かれて行われました。

私が審査員として参加した会場では、「台風による十勝の農業被害」、「東京五輪における観光対策」、「ソーシャル・メディアがもたらす社会への影響」など、社会的に注目を集めるテーマがいち早く取り上げられており、それぞれに興味を惹かれました。なかでも最も好評を得ていたのは、「音楽シーン」の移り変わりと社会経済的背景をまとめた報告でした。プレゼンという視点からみると、図式化し、分かり易くしようと工夫が見られる報告は、論旨も練られていたと感じました。他者の発表と比較し、自分たちの良いところと、不十分なところを知る貴重な機会にもなったと思います。参加した学生には、ここで得たものを次年度からの専門ゼミ等で大いに活用して頂きたいです。(宮入)



# 研究室の窓から

## 人間発達の開発政策を求めて 「森林」をのぞき窓に、 「地域」を導きの糸に

早尻 正宏 経済学部准教授  
はやじり まさひろ

【専門は地域経済学、林業経済論、協同組合論】

2007年北海道大学大学院農学研究科博士後期課程修了、博士(農学)。

とっとり地域連携・総合研究センター研究員、山形大学農学部助教、同准教授を経て現職

●主な著書に、『福島に農林漁業をとり戻す』みすず書房、2015年(共著)、2016年度日本協同組合学会学術賞受賞



### 森林問題を窓に社会全体を認識する —小さなことから大きな世界へ—

私たちの国が抱える森林問題は海外とは大きく異なります。たとえば、東南アジアやアマゾンの熱帯雨林では、過度な商業伐採、農地転用、鉱業開発等により、いわば人の手が森林に加わり過ぎることで減少・劣化が進んでいます。しかし、国内では木材価格の下落が続いた結果、森林所有者の経営意欲が失われ、所有者不在や山林境界不明の森林が増えるなど、国土面積の約3割を占める人工林の管理が滞っています。海外では過剰な人間活動が、逆に、国内では人間活動の停滞が森林の荒廃を招いているのです。

森林は、木材を生産するという経済的機能だけでなく、水源のかん養、土砂災害の防止、生物多様性の保全などの公益的機能を有しています。この公益的機能を享受するのは私たち都市に住むものも含めた不特定多数の人々です。また、林業の衰退は、林業それ自身の問題もちろんなありますが、経済成長を最優先とした戦後日本の地域開発がもたらしたものでもあります。森林にいかに向き合うかは、私たちの暮らしと地続きのテーマなのです。

たしかに日本林業をどう立て直すのかというのは大切な問いです。ただ、私は、林業というGDPの0.1%にも満たない周辺的な産業から戦後日本の地域開発を捉え直すことの方に興味を抱きます。周辺に位置するがゆえにメインストリームの本質がみえるということがあると思うからです。たとえば、リゾート開発で買い漁られた林地の潰滅にみられるように、林業(森林、山村)はその時々「豊かさ」の追求の影でしわ寄せを受けてきました。逆説的ではありますが、このように政策に翻弄されてきたからこそ、地域開発のあり方をめぐる論点——「豊かさ」の意味も含めて——をより浮き彫りにすることができる、と私は考えています。

森林をのぞき窓に社会全体を把握するというこの意味はここにあります。具体的には、戦後日本の地域開発——国家という

「上」からの国土政策——のゆがみを直視する制度分析と、事態打開の方向性を国内外の地域再生の取り組み——地域発の「下」からの地域政策——から学ぶ実態分析を重ね合わせながら、開発政策の課題を明らかにすること。それが私の大きな研究テーマです。

### 「過疎」発祥の中国山地、原子力災害 に向き合う福島からみえること

シンクタンクの研究員として地域づくりのお手伝いをした、町面積の94%を森林が占める鳥取県智頭町では、住民自らが地域の課題を洗い出し、その解決に向け実際に行動するという住民参加型の地域づくりが展開していました。そこでは、地域固有の環境資源である森林の新しい利用のあり方が提起され、環境保全と雇用創出を結び付けた地域振興策が住民と行政の協働により進められていました。未就学児が雨の日も雪の日も一年中、野外で過ごす森のようちえんや、健康増進を目的とした森林セラピーは、木材生産の枠にとらわれない森林利用の新しい道筋を示すものでした。

原子力災害という未曾有の事態に見舞われた福島県の森林再生に関する調査研究に取り組む中で出会ったのは、「次の世代に暮らしをつなぐために、いまここで生きる基盤をつくっておきたい」と考え、営林再開に向け試行錯誤を続ける人々でした。放射性物質による森林の汚染という過酷な現実を前にしながらも、森林組合という非営利・協同組織に集う人々が連帯して、人間と自然の営みを、地域と産業をとり戻そうとする姿は、コミュニティと環境資源に根



2016年9月に英国プリストル市で実施した、社会的企業が運営するシティファームの調査の一コマ。地域住民への学習機会の提供を通しコミュニティ再生を目指す取り組み(左端が筆者)

差した産業形成こそが地域再生のカギであることを示すものです。

私が心を打たれたのはこうした「土地とともに生きてきた人々」の意識的な実践です。過疎という言葉が生まれた中国山地も、原子力災害に向き合う福島も、人口減少や地域衰退という私たちの国の将来を先取りする課題先進地です。そこでの地域再生の多様な実践から得られた知見は、都市であるか農村であるかを問わず、同様の課題を今後抱えることになる他地域への示唆となります。

### 人間発達の開発政策に向けて

課題先進地の実践が指し示すのは、公共事業や企業誘致に依存した開発モデルが破たんしたいま、地域の再生には人間発達という視点が必要であり、地域経済を支える人々への投資こそが重要であるということです。それはヒューマンイズム——ここでは単に善意という意味で理解してもらってけっこうです——ではなく、私たちが実際に働き暮らす地域社会の持続可能性の観点から、一つのシステムとして進めるべきなのなのです。それを私は、さしあたり、人間発達の開発政策と呼びたいと思います。

農業経済学者の田代洋一はかつて「与件の是非を問うのが経済学だ」と述べました。それが与件(与えられた条件)の中でいかに対応するかを考える経営学とは決定的に違うところであり、ユニークな点でもあります。森林問題を切り口として、現場の視点から社会全体の問題を冷静に捉え、オルタナティブな社会のあり方を考え抜くこと、そして、その実現に必要な条件を明らかにすること、これこそが私の経済学の課題です。

学的営みとは、実証(調査)と理論(概念形成)を統一する不断の過程です。課題先進地にほかならない北海道の山辺を丹念に歩き、「土地とともに生きてきた(あるいは、生きていこうとする)人々」の心を汲み取り、それを克明に記録する実証を通し、理論を鍛え上げ、北海道発の人間発達の開発政策を練り上げていきたいと思っています。



# アラスカ北極海、徒歩3,200キロの放浪へ そして、自ら出版社を立ち上げ、その旅行記を出版 警察官を辞して歩き始めた人生とは！

**吉田 翔さん**  
よしだ しょう

公務員志望が多い本学にあって、その公務員職を辞して人生を模索しながら旅をし、出版社を立ち上げた吉田翔さん。卒業後10年間の旅路についてうかがった。

◀自著『僕が、見た、旅。』と  
森永博志著『続 ドロップアウトのえらいひと』を手に

**僕の人生はこうじゃない、  
30年、40年先が見える  
人生ではないと**

高校2年生の時だった。友達が交通事故で亡くなったことをきっかけに、警察官を目指す。「公務員になるなら北海学園大学」との定評から本学に入学。警察官という職業に就くには、体力が必要と考え、少林寺拳法部に入り武道を、夏はプールでアルバイトをして水泳に励む。

大学2年からは公務員予備校に通い、ようやくなった警察官をわずか半年で退職。社会に出ると、理想と現実の

ギャップに悩む事は良くあるが、彼の場合はそうではなかった。活字が苦手な、本を読む事が少なかった吉田さんが、20歳の頃偶然手にしたのが『ドロップアウトのえら

いひと』（森永博志著・東京書籍1995年）。何かを捨て、人生の再出発をした人たちを紹介した内容だった。手垢がつくぐらい読んだ。

「僕が単に世間を全然知らなかっただけですけれど、こういう人たちが本当にいるんだと。それが自分の人生に関して考え始めるきっかけになりました。警察官試験に合格し、卒業を待つまでの間に沖縄・宮古島に1ヶ月半の旅をした時、大学4年間、疎遠だった父親が旅先に電話をくれました。それまでのわだかまりが解けて、電話が終わったとたん何故か泣いていました。そしてまたこの本を読み返した時、今まで以上に心を打たれました」

これからの人生を変えたいと思った。けれどすぐには変えることが出来ないのも人生。警察官生活は半年間、問題もなく続けたが、心の片隅にはいつも別な生き方を考

える自分がいた。

「警察官になったが、もう警察官になってしまいましたけれど、まだ23歳だ。じゃあここから、人生を180度振り切ることは可能だと。僕の人生はこうじゃない、30年、40年先が見える人生ではないと」

## 今しかないんだと思ったら

家族を落胆させる結果になったが、まず東京へ向かった。「ドロップアウトのえらいひと」の中に登場する門野久志が経営するレッドシューズという場所に行く。国内外の多くのミュージシャンが訪れるというレッドシューズは伝説的なロックバーとして名を馳せていた。

「その本の著者、森永さんと、その本の中で僕が一番グッときた門野久志さんの2人に会いに行きました。さらに運良くレッドシューズに潜り込ませてもらい、働ける



写真左上：アメリカ合衆国アラスカ州のブルックス山脈と果てしなく続く道 下：幾度となく遭遇した灰色熊（グリズリー） 右：愛車のリヤカーと



所属した西村ゼミの皆さんと地域研修で訪問したニセコ町・高橋牧場にて(前列右から2人が吉田さん)。大学時代は西村先生と「地域を盛り上げるためにはどうしたら良いか」と、実際に現地に足を運び、感じ、学んだことが大きかった。

## 吉田さんの本をプレゼント!

20名の方に『僕が、見た、旅。』を差し上げます。

メールアドレス info@labbott.co.jpに、氏名・学生番号・電話番号、『僕が、見た、旅。』希望と明記し、メールでお申し込みください。

20名の方にはメールでお知らせします。

4月15日中で、締め切りとします。



ことになりました。1年半お世話になりました。よし、じゃあこんな店を自分で作ってみたらもっと面白いんじゃないか。自分のやりたいことができたのです」

東京で知り合ったさまざまな人達に囲まれ、店の経営は順調で4年が過ぎた。ふと気づくと捨てたはずの安定した生活。やがて道路拡張による移転話が持ち上がったのを機に閉店。その先にアラスカ行があった。アラスカが舞台の映画『イントゥ・ザ・ワイルド』(Into the Wild・米2007年)、そこに小学生のときから好きだったアラスカの写真集が重なり、心に沈んでいたものが沸き上がってきているタイミングだった。

「アラスカとか北国の方への思いが、その映画を観てパーンと跳ね返ったと言いますか、あ、このタイミング何かあるのかなと。道路拡張があって、店もなくなりますし、この燃え上がるアラスカに対する思い、この気持ちっていうのはそのうち絶対なくなるだろう、今燃え上がっている思いは今しかないんだと思った」

急テンポにアラスカへ気持ちは飛んだ。移動手段は徒歩、道を調べると町から町の間は4,500キロもある。食料を運ぶにはリアカー、徒歩という発想に行き着く。人家、人間の気配など全くないところをひたすら歩き続ける。孤独を背中にしよった旅が始まった。

「とりあえずゴール地点は決めてるけれども、旅人がよくいう自分探しの旅っていうわけでもない。アラスカを感じながら見ながら、黙々と歩く。寂しさもあるけれども、僕は北海道育ちでよく森で遊んでいたんで、好きなんですよ。ひたすら歩いて、なんというかずーっと自分自身のことを考え、不思議と昔のことばかり思い出す。楽しかったのは動物との出会いです。自分の10メートル横をバッファローが20頭く

らい、ダダダダダーって走ってるわけです。帰ってきてからも、今この時間にバッファローは走ってるなーと思うと、気持ちが豊かになるんです。熊4頭にも挟まれました。俺はここで死ぬのかと、初めて死を覚悟しました。どうせ死ぬならと、やけくそで突進して行ったら、やっぱり野生の熊ですよ。パッと逃げるんです。初めて見る者同士、向こうも緊張するし僕も緊張する。同じだと思った瞬間に、恐怖心というよりも逆に何か安らぎを感じました」

当初、カナダから入り、アラスカのフェアバンクスをゴールと決めていたが、更に800キロ先の北極海を目指した。体力、精神もきつかった。

「着いた瞬間は、あーこれで終わりかーと。僕の今まで溜め込んだアラスカへの思いが、ここで終わるのかと思ったら、もう足が痛くて歩きたくない、歩き続けた4ヶ月間でしたが、日常に染まった心と身体は自由になったと感じました。僕は自由だと叫んでいました」

### とりあえず会社から作ろう!

帰国後、次にやることを考えた。アラスカの旅の記録を残したいと思った。

「パッと思いつきですよ。そう、せっかくだから記録に残したいなど。日記はつけてたんで、それを思い出しながらとりあえず書きました。じゃあ本にしたい、出版社に持って行こうと。僕上から攻めるの好きなんで大手出版社に持って行ったら全く相手にされませんでした。だったら自分で本って作れないのかな、出版社作れないのかなって。まあそれも店作る時と一緒に何かノリと言いますか。これやったら楽しいんじゃないかな、やってしまおう、とりあえず会社から作ってしまおうと」

そして、インターネットを通じて不特定

多数の人から資金の出資を募るクラウドファンディングを知り、出版費用を得ることができた。運良く集まったというが、共感できる内容の本であることが伝わったのだ。『僕が、見た、旅。—アラスカ北極海へ徒歩3,200km キマグレ放浪記』出版社バックミンスターは生まれた。

「出版業は続けたい。今後活動を何か一個に絞ることはしないと思います。自分が思いつくもの、楽しいと思うもの、やりたいと思うこと、僕が中心になっている人たちと協力していろんなことが動いたら面白いなど」

今回のOB訪問「働きマン」は、豊平からアラスカまでの長い旅を一気にうかがった。最後に吉田さんから後輩諸君へのメッセージ。

「心惹かれるものがあった瞬間、それを一番大事にした方が良いんじゃないかな。そして、それは自分で掴むしかない」



profile .....  
1984年 北広島市生まれ  
2003年 北広島西高校卒  
2003年 本学部地域経済学科入学  
2007年 本学部卒  
2007年 北海道警察退職  
2016年 (株)バックミンスター設立  
URL <http://www.buckminstar.com>

From a Distance 7

「語学」と「地域研究」

● 辻 弘範 [経済学部教授]

私はいま、全学部の学生を対象に韓国・朝鮮語科目を教えています。ですが、私は「語学」という学問を専門としているわけではありません。なぜなら、大学を卒業する時に与えられる学位に、「語学」というものは存在しないからです。いや、学問の世界においては、「語学」という領域だけが存在しないのです。私は大学時代、外国語学部で朝鮮語と朝鮮史を学びましたが、卒業時に与えられた学位は「言語・地域文化」ですし、大学院で取得した学位は「社会学」です。私は大学院で歴史学を専攻しましたが、所属の関係で社会学を修めたことになっています。

「外国語学部」というと、語学ばかり勉

強している純文系学部というイメージが強いかもしれませんが、実際には人文科学・社会科学・自然科学のカリキュラムも充実しています。学生たちが所属する学科（語科）で修得した語学力を用いて、その言語が話される地域について、さまざまな学問領域から研究できるシステムになっているのです。これは「地域研究」（Area Studies）と呼ばれる研究スタイルの基本です。「外国語大学」の英訳は「University of Foreign Studies」、つまり「海外地域研究大学」であって、実は「外国語」だけを学ぶ所ではないのです。私の例でいえば、朝鮮半島の地域社会について研究するために歴史学的なアプローチを選択した、ということになります。経済学部のカリキュラムのように、初めから「経済学ありき」ではないのです。

こうした地域研究のスタイルは、悪くいえば「どっちつかず」ですが、良くいえば「特定の学問領域にとらわれない」ことに

なります。さまざまな領域に目を配り、手を伸ばしながらも、ある特定の地域について研究するという「立ち位置」は決してブレません。もちろん、分野ごとに研究の「作法」や「お約束」がありますので、それらをきちんと押さえる必要はありますが。私はこうしたスタイルで通してきたからこそ、今ではさまざまな分野について書かれた韓国・朝鮮語の文章を読んで内容を理解できますし、その語学力を本学の韓国・朝鮮語の授業で活かすことができるのです。



韓国釜山市海雲台海岸 photo: N.Sasaki

2017年就職情報

好調に推移した2017年本学卒業予定者の就職活動でしたが、既に昨年11月からは、来春卒業予定の3年生を対象とした、キャリア支援の一環である学内業界研究会がスタートし、就職活動への取り組みが行われています。

2月6・7日には、3年生を対象としたキャリア支援イベント「LIVE Voice」が行われました。これは、今春の就職内定が決まっている4年生と、その内定先企業の方々から最新のリアルな就職情報を得るために、キャリア支援センターが企画して毎年行っています。

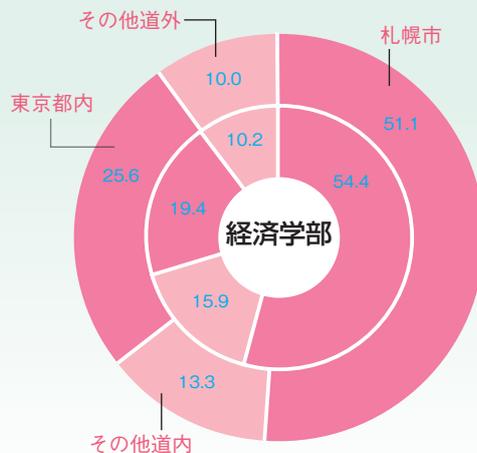
男女別 過去3カ年の主な内定先

企業・団体名	男子人数	女子人数
北海道職員	24	10
日本郵政グループ	16	7
北海道警察	18	3
札幌市役所	12	6
札幌市消防	14	0
北洋銀行	10	4
国家公務員	11	2
北海道信用金庫	12	0
マックスバリュ北海道	11	1
教員	9	1
生活協同組合コープさっぽろ	8	2
北海道労働金庫	8	2
北海道銀行	6	3
空知信用金庫	4	3
北海道旅客鉄道株式会社	7	0
株式会社セブンイレブン・ジャパン	5	1
株式会社マイナビ	3	3
北海道セキスイハイム株式会社	4	2
株式会社一条工務店	6	0
札幌信用金庫	6	0
株式会社サッポロドラッグストアー	3	2
イオン北海道株式会社	1	3

[経済学部のみ] ※ 公務員は合格者数

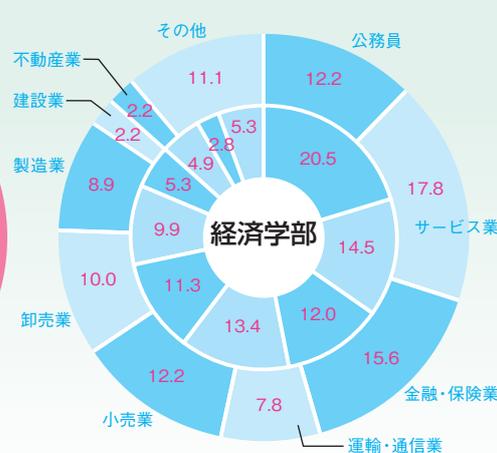
男女別 本社所在地別就職状況

[2016年3月卒業生] 内側男子/外側女子(%)



男女別 業種別就職状況

[2016年3月卒業生] 内側男子/外側女子(%)



学内で行われた業界研究会(写真右上)とキャリア支援イベント「LIVE Voice」